

防衛大学校本科第14期学生及び理工学研究科第7期学生 卒業式における学校長式辞（昭和45年3月21日）

本日、本科第14期学生及び研究科第7期学生の卒業式を挙行いたしましたところ、祭日にも拘わらず、佐藤内閣総理大臣^{注(1)}、船田衆議院議長^{注(2)}、中曽根防衛庁長官^{注(3)}をはじめ、内外多数の来賓各位の御来臨をいただきましたことは、卒業学生の喜びは申すまでもなく、学校関係者一同にとり無上の光栄と存じます。また、父兄の皆様方にも遠く北海道等から多数御参列を得ましたことは、私の心から感謝に堪えないところであり、厚く御礼申し上げる次第であります。

本日の卒業生は、540名であります。いずれも御覧のように立派な青年であります。わが国将来の発展に大きく寄与するであろう前途有為な若人のみであります。私は、これらの若人を本日社会に送り出しかつことを、教官、職員一同と共に内心秘かに誇りにしているところでもあります。

さて研究科の諸君、卒業おめでとう。諸君は昭和43年4月本校に入校されました。部隊、機関等の勤務を離れての勉学はいろいろ苦勞のあったことと想像いたします。私は、ここに諸君の2年間に亘る真面目な努力に対し、衷心から敬意を表します。帰任の上は、本校において修得された知識・技能を基礎にいよいよ研究を重ね、国防任務の遂行に御盡瘁^{しんすい}あらんことを切望いたします。

本科の諸君、卒業おめでとう。この小原台上における4年間の生活を終え、本校を去るに当たっていろいろな思い出があるでしょう。苦しくもあり楽しくもあったということかもしれません。私も諸君の入校直後の



第2代学校長 大森 寛

注(1) 佐藤榮作

注(2) 船田 中^{なか}

注(3) 中曽根康弘

訓練において、右左を間違えたり、行進さえも十分できなかった頃から、昨年の自衛隊記念日には、学生隊を指揮して堂々と神宮外苑を行進した成長振りなどを思い浮かべています。

また諸君の中には、はじめ何故国防が必要なのか分からないという人がおりました。また、自衛官になるという決心がつかないと悩んでいた人もおりました。そういう問題について何回か討論もしました。私にとっても、諸君と共に過ごした4年間の思い出はなかなか尽きません。今、諸君は、自衛官としての資質を立派に備えて卒業されることになりました。私は心からお祝いを申し述べる次第です。

自衛官の任務は、いうまでもなく外部からの侵略に対し、わが国の平和と安全を守るということです。国防の担い手として、国民は諸君に大きな期待を抱いています。諸君がわが国の繁栄と人類の福祉に貢献し得る立場に立っているからです。しかし国民は、期待と同時に一片の危惧の念をもっているかもしれません。それは、實際上、諸君がわが国の武力を運用管理する立場に立ち、諸君の動向がわが国の安危に大きな影響を及ぼす可能性があるからです。諸君は今後立派に成長して、これらの関心に正しく応えねばなりません。諸君はそのためのビジョンをもつことが必要です。

軍人という言葉は「いくさびと」と解釈するならば、明治以来の軍人像に対し、諸君の将来のビジョンは、新しい時代の軍人像であると言って差支えないと思います。佐藤総理の御努力により沖縄の返還も決まりました。自主防衛論も漸く高まってきました。今日、新しい時代の軍人像を取り上げることは、決して無益な行き過ぎではないと考え、私は諸君の首途に当り、その問題についてお話ししたいと思います。

自衛隊は戦後に生れた新しい組織であるというので、これまで自衛隊と旧軍との関係については、殆んど触れられておりません。いわばタブーであったといってよいでしょう。

旧軍の統帥権は一般政務から独立していました。それに対し自衛隊は内閣総理大臣を最高指揮官とし、政治優先の原則に従っている点において、両者は根本的に相違しています。しかし外部からの侵略に対し国家、国民を守護するという任務については、同じ立場に立っているといわなければなりません。わが祖国の防衛は、父祖の手によって立派に受け継がれてきました。そういう意味からすれば、自衛隊は旧陸海軍からその良い伝統と遺産とを引き継ぐべき立場にあります。旧軍人と自衛官との関係についても同じことです。嘗て本校には、旧軍人は先輩とは考えな

いという雰囲気がありました。陸士^{注(4)}・海兵^{注(5)}と本校とは、設立の経緯や教育方針等を異にしています。厳格な意味における先輩といえないかもしれません。しかし最近においては、同じ使命につながる先輩、後輩としての親愛感が芽生えてきたことは、当然のことながら喜ぶべき傾向であると私は考えます。

諸君の目標である新しい時代の軍人像を考えるには、旧軍人像はどうであったかを知ることが大切です。明治以来終戦に至る間の軍人像を、一概に論ずることは極めて難しい問題ですが、それが明治15年の「軍人勅諭」を離れて考えられないことは何人も異論のないところだと思います。「軍人勅諭」には、忠節、礼儀、武勇、信義、質素の5つの徳目が掲げられています。私は、これらの徳目は今なお軍人の基礎的資質であると考えます。しかし軍人像も、時代の変遷によって変化すべきものであることは申すまでもありません。旧軍人像は「軍人勅諭」を中心とし、天皇の絶対主権と富国強兵の国是の下に次第に形づくられたものであります。こういう背景をもった軍人像を一言にして言えば、忠勇な軍人ということでもありました。その本質は変わらないとしても、時代が移って満州事変以降においては、かなり様相が違ってきました。非常事態下、ことに敗戦時においては、異常な軍人像がわれわれの印象に残った事実を否定できません。率直に言えば、それは人間疎外の戦闘的軍人像とでも評すべきものでありました。国運を賭けた大戦争と大量に動員された未教育者によって醸し出されたものかもしれません。

軍人には、任務遂行上必要な特殊の資質が不可欠なことはいうまでもありません。最近、科学技術の急激な革新に伴って、国防に対する考え方は変わってきました。国防の本義は、先ず戦争の阻止、抑制を目的とするようになりました。また国防任務達成は、単に武力の行使のみによっては不可能になりました。高度の防衛に関する技術のほか、政治、経済、外交等の分野に亘る広範な知識、技能を必要とするに至りました。軍人の備うべき資質は昔旧の比ではありません。従って、職能的特性の変化に従って軍人像が変わることは当然であります。

しかし旧軍人像に対比し、新しい軍人像を考える場合には、職能的特性の変化の外に、一つの重要な問題があるのではないのでしょうか。私は国民の期待に応える新しい軍人像は、人間性の尊重こそ、その基調でな

注(4) 陸軍士官学校

注(5) 海軍兵学校

ければならないと考えます。立派な軍人は、先ず立派な人間でもあり、良識のある社会人でなければなりません。科学技術はさらに進歩するでしょう。国防に関する知識、技能もいよいよ複雑化するものと考えます。しかし人智の進歩に伴い、ますます重要性を増すものは、人間性の尊重ということです。人間性の重視と職能的特性の調和点に新しい時代の軍人像は生れると思います。人間的軍人像こそ、民主的な文化国家にふさわしい新しい軍人像です。

明治時代は「軍人勅諭」と並んで「教育勅語」がありました。「軍人勅諭」は、当然のことながら軍人の心構えを諭されたものと理解すべきであります。私の解釈にして誤りでなければ、旧軍時代には、次第に軍人の職能的特性が^{あたか}宛も全軍人像であるかの如くに強調されるに至ったのではないのでしょうか。現在の社会においても、多くの場合、人間は職能的特性を帯びて存在しています。さりとして職能的特性が、その人の全人格ではありません。人間としての一般的資質が基礎であることは当然であります。これは軍人のような特殊な職業においても、決して例外ではありません。このことは諸君のビジョンを考える場合大切な問題です。

本校における教育は、以上のような理念に基づいて実施しています。諸君は今後、自衛官としての生涯を送るに当り、この最も重要な問題を念頭におき、いよいよ研鑽に励み、国民の期待に正しく応えられるよう切望してやみません。

これをもって式辞といたします。